

第2次 深谷市総合計画

渋沢栄一が遺した  
功績や精神・考え方など

第2編 後期基本計画（抜粋）



第3部行政分野別計画の基本施策では、「渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など」において、渋沢栄一のこれまでの功績や、大切にすべき考え方などを行政分野別にとりまとめて記載しています。

「渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など」の記載にあたっては、以下の書籍などを参考にしています。

### 参考書籍等

- ・ 渋沢栄一述・長幸男校注『雨夜譚(あまよがたり)』(岩波書店、1984)
- ・ 渋沢栄一著・守屋淳編訳『現代語訳 渋沢栄一自伝「論語と算盤」を道標として』(平凡社、2012)
- ・ 渋沢栄一著・守屋淳訳『現代語訳 論語と算盤』(筑摩書房、2010)
- ・ デジタル版『渋沢栄一伝記資料』渋沢栄一記念財団  
<<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryo/digital/main/>>(参照2022-09-01)
- ・ 渋沢栄一記念財団『渋沢栄一を知る事典』(東京堂出版、2012)
- ・ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一訓言集』(国書刊行会、1986)
- ・ 寺田露伴『渋沢栄一伝』(岩波書店、2020)
- ・ 馬場裕子「渋沢栄一と郷里の社寺」、山口輝臣編『渋沢栄一はなぜ「宗教」を支援したのか -人を見出し、共鳴を形にする-』(ミネルヴァ書房、2022)
- ・ 日本煉瓦製造株式会社社史編集委員会編『日本煉瓦100 年史』(日本煉瓦製造株式会社、1990)
- ・ 渋沢史料館『学生寄宿舍の世界と渋沢栄一 ～埼玉学生誘掖会の誕生～』図録、2010
- ・ 渋沢史料館『渋沢栄一と関東大震災 -復興へのまなざし-』図録、2010
- ・ 是澤博昭『青い目の人形と近代日本 渋沢栄一とL・ギュリックの夢の行方』(世織書房、2010)
- ・ 今泉宜子『明治神宮-「伝統」を創った大プロジェクト』(新潮社、2013)
- ・ 栗山英樹『育てる力 栗山英樹「論語と算盤」の教え』(宝島社、2018)

など

## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（子育て分野）

- 栄一は約500の企業の設立や運営に関わり、600以上の社会公共事業や教育・国際親善などに携わりました。
- また、栄一は、日本煉瓦製造会社れんがの設立に関わり、明治21(1888)年に現在の深谷市上敷免に工場が設立されました。この工場には明治39(1906)年に専用の保育園が設立され、日本で4番目、埼玉県内では初めての保育園と言われています。昭和18(1943)年に改めて恒徳保育園として開設され、翌年には社員のみならず、地域の児童を受け入れました。
- さらに、埼玉県初の児童福祉施設である埼玉育児院は、福祉の発展に強い思いをもっていた栄一による資金援助により、経営を軌道に乗せ、現在も子どもの心身の健やかな成長と自立を支援する施設として、活動を続けています。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（保健分野）

- 栄一は、病気の研究や医療活動を積極的に支援しました。当時不治の病と恐れられていた結核の撲滅を目指し、近代日本医学の父・北里柴三郎が提唱し設立された日本結核予防協会では副会頭に就任し、感染症予防を後押ししました(財団法人化後は会頭に就任)。
- また、栄一は、できるだけ多くの国民が医療にかかることができるようにという思いから、医療福祉機関に対しても多額の寄附を行いました。特に、東京養育院のほか、日本赤十字社、東京慈恵会、聖路加病院せいりか(現在の聖路加国際病院)、済生会さいせいかいなどを支援しました。
- 晩年は、「坂本屈伸道」と呼ばれる運動による健康法を取り入れ、健康維持に努め、91歳の長寿をまっとうしました。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（福祉分野）

- 栄一の母えいは、栄一を慈しみ深く育て、弱き人々にものを施すなど慈悲深い人でした。その母の影響により、栄一は社会福祉・医療事業に積極的に取り組みました。
- 特に、「東京養育院」（現在の東京都健康長寿医療センター）では、生活困窮者や身寄りのない児童を保護し、医療や児童福祉、障害者福祉や高齢者介護など利用者にあった施設をつくり、亡くなるまで約50年以上院長を務めました。
- 明治期の社会福祉事業は、孤児や遺児の保護などを民間の宗教家や篤志家が中心となって行っていました。こうした活動は次第にその範囲を広げ、明治36(1903)年に「日本慈善同盟会」の設立が決定され、その後、会の名称を「中央慈善協会」（現在の全国社会福祉協議会の前身の一つ）に改め、栄一は初代会長に就任しました。
- 栄一は、経済の豊かさに反比例して増加する生活困窮者を支援する意義を説き、法制度の改善や救済事業の連携・組織化を推進しました。
- 生涯を通じて多くの寄附を行った栄一の寄附活動の特色は、1人が巨額の支援を行うのではなく、多くの人々の参加を勧めることでした。栄一は、寄附者名簿の最初に自らの氏名と金額を明示する方法で、財界人や企業に回覧し、多くの人々の協力を促しました。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（教育分野）

- 栄一は教育分野でも尽力し、特に実業教育に力を入れました。とりわけ、商人の地位を向上させ、幅広い知識を得ることで、良き経営者になれるような人材の育成を行いました。設立や支援に関わった学校には、商法講習所（現在の一橋大学）や大倉商業学校（現在の東京経済大学）、深谷商業学校（現在の埼玉県立深谷商業高等学校）をはじめ多くの商業学校があります。
- また、栄一は、「新しき時代には新しき人物を養成して新しき事物を処理せねばならない」と言っており、次世代を育成するために、さまざまな学校の設立や教育への資金援助に熱心に取り組みしました。
- さらに、学校の設立以外にも学生に対する支援をしています。埼玉県出身の学生の寄宿舎をつくるため、埼玉学友会が結成され、明治35(1902)年に埼玉学生誘掖会が創設された際、栄一は初代会頭に就任しました。会頭に就任後、栄一は積極的に行事にも出席し、学生たちとの交流を図りました。
- 「立志」（夢を持ち志高く生きること）と「忠恕」（まごころ・思いやり）は栄一が生涯貫いた思想と言われており、現在の深谷市の教育に引き継がれています。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（文化分野）

- 栄一は無類の読書好きで、生涯を通じて学び続ける姿勢を貫きました。幼少期は父の市郎右衛門から漢文の素読を学び、従兄の尾高惇忠おたかじゅんちゅうの私塾へ通い、論語をはじめ四書五経を学びました。また、パリ万国博覧会に随行する道中では、フランス語とともに食事マナーなど外国の風習も学んでいます。
- 幼少期に血洗島の獅子舞などに親しんだことから、芸能など文化財保存による地域振興に力を注ぎました。また、明治20（1887）年に設立された日本美術協会で評議員を務めるほか、明治44（1911）年には、栄一らが発起人となり、日本初の西洋式劇場として帝国劇場を東京・日比谷に建設しました。
- 栄一の講演録を編集し、一冊に取りまとめられた「ろんご論語とそろばん算盤」は、経営者のみならずスポーツでのチーム経営にも積極的に取り入れられ、大リーグプレイヤーの大谷翔平選手は、日本ハムファイターズ時代に栗山監督の勧めにより、この本を読破していました。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（農業分野）

- 栄一の生家は代々農業を営んでおり、麦作のみならず、養蚕や藍染の原料である藍玉の製造・販売も手掛けて財を成しました。栄一は少年時代に、家業を手伝う過程で農作物の目利きなど、物の本質を見極める大切さや、商売の駆け引きや面白さを体験する機会を得ています。
- 22歳の時に栄一は、藍農家を招いて宴会を開き、相撲番付に倣った藍の番付を作って披露し、大関を上座に座らせて藍づくりのノウハウを語らせました。これは品質を競わせるだけでなく、生産技術の情報を皆で共有することで地元の産業を盛り上げようという戦略であり、皆が良い社会を目指した、後の栄一につながる抜群の企画力を発揮しました。
- また、故郷の人々が農村振興として、地域の特性に応じた生産を拡大するために産業基本調査を行い、これに基づき、八基村の耕地整理を計画的に実施することを支援しました。
- 食料生産増加のため、化学肥料の国内製造を目指した栄一は、たかみねじょうきち高峰讓吉らと協議を重ね、明治20（1887）年、東京人造肥料会社を設立し、安定した肥料によって農業を後押ししました。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（商工業分野）

- 栄一は、生涯に約500の企業の設立や運営に関わりました。国が認めた初めての銀行である第一国立銀行（現在のみずほ銀行）、抄紙会社（現在の王子製紙）をはじめ関わった会社の業種は、金融、交通、商工業、鉱業、農林水産、観光サービス業など多岐に渡ります。
- 栄一が設立に関わった富岡製糸場は、日本初の官営模範器械製糸場で、明治5（1872）年に設立されました。栄一は大蔵省時代に担当となり、大隈重信や伊藤博文、尾高惇忠おだかじゅんちゆうらとともに設立の準備を行いました。当時としては世界でも有数の規模の工場で、全国から数百人の工女が集まりました。
- 栄一は自らの思想や行動を語る時「合本法（合本主義）」という言葉を用いています。合本主義は、一人ひとりの小さな資本を合わせ、多くの人々のためになる事業を実施することで、公共の利益を生み出す方法と考えていました。
- さらに、栄一は、明治期に不平等条約改正に向けての世論形成の場をつくり、業種を超えた情報・意見交換の場として、実業界の地位向上につなげることなどを目的として、東京商法会議所（現在の東京商工会議所）を設立し、初代会頭を務めました。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（暮らし分野）

- 大正12（1923）年に関東大震災が発生した際、栄一は、自らが被災者でありながらも、被害が少なかった飛鳥山の邸宅を食料物資や炊き出しの場として開放するなど、震災救護・救援活動をいち早く進めました。
- 当時83歳の栄一の身を心配した子どもたちから故郷深谷への避難を勧められると、「わしのような老人は、こういう時にいささかなりとも働いてこそ、生きている申し訳がたつようなものだ」と叱りつけ、飛鳥山の自邸に残り、震災の翌日から罹災者の救済に努めました。
- 栄一は、民間ならではの迅速さと、苦境に追い込まれた多様な立場の人へのきめ細かな配慮が必要と考え、民間有志による救護・復興に関する組織として大震災善後会を結成し、国内外から集められた義援金は、罹災者の支援事業を支えました。
- 震災直後には、山本権兵衛首相や後藤新平からの帝都復興審議会委員就任の要請を受け入れました。また、東京が経済発展するための港湾整備の支援を行い、物資の流通をスムーズにしました。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（暮らし分野）

- 栄一は地域の発展を大事にしており、邸宅のある王子・滝野川地域施設への助言や寄附などのほか、多くの地域の発展や社会教育にも関わり、地域住民による自治組織の発展への援助などを行いました。
- 栄一の故郷である血洗島村は、合併により八基村となりますが、その村名は、村民から相談を受けた栄一の提案によるものでした。八つの村（下手計、上手計、血洗島、南阿賀野、北阿賀野、横瀬、町田、大塚）が大八州（日本国）<sup>もとこ</sup>の基となり、ほかの模範となるようにとの栄一の思いが込められていました。
- また、埼玉県人会は、大正2（1913）年に栄一をはじめ、愛郷心に燃えた有力な県人諸氏によって設立されました。埼玉県出身者の知徳を進め、人格を高め、社会文化の向上発展に寄与する組織で、栄一は会長を務めています。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（環境分野）

- 明治神宮創建の際には、栄一は民意から設立された明治神宮奉賛会副会長となり、外苑造営の寄附金集めに奔走し、その結果、巨額の資金が集まり、大正9（1920）年に明治神宮が創建されました。
- 現在に至る明治神宮を囲む森は、栄一らの呼びかけに応じ、全国から集まった10万本近い献木が基礎になってつくられました。
- 埼玉県出身で栄一とゆかりのある林学博士の本多静六は、いかに自然林に近づけられるかを考え、植樹した木々自らが世代交代を繰り返し、時間を経て自然林へと遷移する循環型の森の完成を目指しました。
- 100年の月日を費やし、明治神宮の森は2800種類以上の生物が生息し、生物多様性を支える持続可能な森であり続けています。
- さらに、栄一は、理化学の力で世の中を良くするため、研究所を設立するという高峰譲吉の科学研究所構想に賛成し、大隈重信の賛同を得て、理化学研究所を設立、これまで数多くの優秀な科学者を輩出しています。





## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（都市分野）

- 栄一は、イギリスで提唱された都市と農村の魅力を併せ持つ「田園都市構想」を理想に、緑豊かな住宅都市の建設を目指し、大正7(1918)年、田園都市株式会社（現在の東急株式会社）を設立しました。
- また、洗足<sup>せんぞくでんえんとし</sup>田園都市（現在の洗足地域）、多摩川台地区（現在の田園調布、玉川田園調布）に分譲した住宅地をつくり、都市部との交通の確保のため鉄道事業も営みました。大正12(1923)年の関東大震災では、東京や横浜で大火災が発生しましたが、田園都市の住宅での被害は一軒もなく、安全性が立証される形となり、郊外移転の風潮が生まれました。
- 衛生環境の不備により、日本全土で感染症が流行した際、栄一の妻、千代も明治15(1882)年に流行したコレラによって42歳の若さで急逝しました。こうした自身の経験から、明治20(1887)年頃より、栄一は東京市の水道の改良に携わり、水道の衛生に配慮した東京水道会社創立の計画を立てました。その後、水道事業は東京市が行うことになり、淀橋浄水場が整備されるなど、東京の衛生環境は大きく改善しました。



## 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（生活基盤分野）

- 生誕地の血洗島は、利根川の中瀬河岸による水運と中山道の街道により、江戸への利便性が高い場所にありました。また、栄一は、欧州視察を通して、近代国家には社会インフラの整備が必須と実感しました。
- こうした自らの経験から、鉄道・ガス・水道・電気などのインフラは、国民の暮らしを豊かにするために欠かせないものであると考え、多くの財閥が重工業に注力する中、栄一はインフラ事業にも多く携わり、「公益の追及」という観点から、これらの事業を収益化することに成功しました。
- 栄一は、海運や陸運にも積極的に携わりました。日本郵船株式会社の取締役や相談役となったほか、さまざまな鉄道会社の設立や経営に携わり、日本鉄道（現在の東日本旅客鉄道）や東洋初となる東京の地下鉄道開発に貢献するなど、日本のインフラの整備に貢献しました。
- 栄一が設立に関わった日本煉瓦<sup>れんが</sup>製造株式会社は、深谷市上敷免に工場を設立し、深谷産<sup>れんが</sup>の煉瓦は東京駅や日本銀行本店本館をはじめ、明治期の代表的建築物に使用されています。
- 本市の鉄道交通の玄関口である深谷駅は、こうした縁から日本の玄関口である東京駅を模した駅舎となっており、「煉瓦<sup>れんが</sup>のまち深谷」を表す特徴的な建築物となっています。





### 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（協働分野）

- 青年期に体験した岡部落の代官からの理不尽な要求によって、「官尊民卑」の打破を生涯の目標としていました。明治時代になり、江戸時代の身分制度が崩壊したなか、民間の経済人の意識改革のため、「道德経済合一説」を提唱し、商工業者たちに公利公益の大切さを説き、近代社会の礎を築きました。
- また、栄一は女子教育にも関わり、伊藤博文らと女子教育奨励会を創設し、東京女学館や日本女子大学校（現在の日本女子大学）などの設立や運営に携わりました。
- さらに、栄一は、米国での日本人移民問題の解決に民間の立場から尽力しました。大正4（1915）年に、米国での「排日移民法」に心を痛める親日家のシドニー・ギューリックからの提案を受け、友情の印として、米国の子どもたちが日本の子どもたちへ送る「親善人形（青い目の人形）」の橋渡しを行いました。日本からは答礼人形として市松人形を米国に送り、日米の親善と交流を進めました。



### 渋沢栄一が遺した功績や精神・考え方など（行政経営分野）

- 静岡藩の財政難を助け、地域産業を興すため、栄一は、明治2年（1869）年2月に金融機関と物産販売を兼ねた商法会所を設立しました。
- その後、明治新政府から民部省租税正に任命された栄一は、改革を進めるための特命部署として「改正掛」を創設し、度量衡の統一、租税制度の改正、郵便制度、貨幣金融制度の導入など近代日本の基盤整備を行いました。
- さまざまな功績を残した栄一の思想的支柱となったのが道德経済合一説、いわゆる「<sup>ろんご</sup>論語と<sup>そろばん</sup>算盤」でした。栄一は、「仮に一個人のみ大富豪になっても、社会の多数がために貧困に陥るような事業であったならばどんなものであろうか、いかにその人が富を積んでも、その幸福は継続されないではないか。故に国家多数の富を致す方法でなければいかぬというのである。」と言っており、これは、誰一人取り残さないことを誓う持続可能な開発目標（SDGs）に通じるものと考えられています。

